

友人に与えて国民文学を論ずる書

木天兄：

あなたと伯奇兄が国民文学を論じられたお手紙を拝見し、あなた方の意見については十分理解できると思いました。伝道者は言いました。“日の光の下に決して新しい事はない。”と。これはもともととても自然でとてもふつうの道理で、民族主義思想が意識的に文学に発現したものにすぎないと思います。この主張の理由は火を見るよりも明らかで、一国の文学がもし国民のものでないならば、どうすべきか。まさか殖民のもの遺老のものであってよいわけではないでしょう。幸であれ不幸であれ、われわれは中国人として生まれついた以上、自分の意志にかかわらず漢族の長所短所とその運命を共有します。われわれは第一に自らアジア人（“Asiatics”！）の中の漢人であることを自ら認めねばなりません。懸命に前進して、人類の中で漢族の受けるべき幸福を勝ち取り、やれる仕事を成就するのです。——もしわれわれが自らを軽蔑せず、自らを公共の奴隷と認めないのであるならばです。ただ残念なことに中国人の中に外国人が多すぎます。西洋人の小使いと家付奴隷の気が重すぎ、国民としての自覚があまりにもありません。だから政治的に独立を失っているうえに、学術・文芸でも影響を受け、新しい気象がありません。国民文学の呼声はこうした墮落した民族への一本のカンフル剤と言えましょう。効果がどうかは予知できませんが、要するに適切な方法ではあります。

しかしわたしは一言付け加えねばなりません。国民文学を提唱すると同時に必ず個人主義を提唱しなければなりません。国家主義を鼓吹する人が個人主義について極力反対するのを見ると、国家主義がその根柢を失うばかりか、彼らの主張に宗教的気味をもたらし、たやすく狂信に変わってしまいます。その結果はおよそ本国のものなら必ずよく、およそ他国のものなら必ず悪いとなって、自分の国土が世界の中心で、自分の戦いが天下の正義、しかもなおそれを“自尊心”だと言うのです。われわれはひとの侮辱に反抗しますが、決してわれわれがひとを侮辱してよいと言うものではありません。われわれはひとがわれわれの長所を抹殺することを願いませんが、決してわれわれが自分の短所を守るべきだと言うものではありません。われわれが要するのは一切の正義です。正義によってわれわれは自主と自由を要求し、また正義によってわれわれは自己譴責、自己鞭撻をしなければなりません。われわれはいまこのように侮辱されています。一半はもちろん他人の強要によりますが、一半——少なくとも半は——やはり自分の墮落によります。われわれは他人に反対する前にあるいは同時に、力を尽して自分の悪根性を発き削除すべきで、そうしてはじめて民族再生の希望が持てるのです。でなければただの拳匪思想の復活です。拳匪の排外思想をわたしは決して絶対にまちがいだとは思いませんが、その本国は必ずよくて外国は必ず悪いという偏見、“国粹”を用って新法に反抗してよいとする迷信は、結局は拳匪の行いであって、わたしが絶対に反対するものです。国家主義を信奉するなら古文でなければ書かず、古詩でなければ歌わずと信ずる人がいますが、これはとても憂慮させます。恐らく真実な国家主義は劣化するでしょう。われわれが国民文学を提唱するにはこの点に十分注意し、そうした流弊を生じさせてはなりません。だからあなたの言い方に倣ってもう何句かを付け足さなければ

ばなりません。つまり積極的に民族思想を鼓吹するほかに、いくつかの仕事があります。

われわれは民族の卑怯という中風に一針を打たねばならぬ、  
われわれは民族の淫猥という淋毒を消去せねばならぬ、  
われわれは民族の愚昧という瘍を切開せねばならぬ、  
われわれは民族の自大という狂気を去勢しなければならぬ。

以上は三月一日にわたしがあなたに返した手紙で、かつて『京報副刊』第八十号に載りました。今ここに再録したのは、いまのわたしの意見がまだこうでしかないからです。わたしはなぜだか遺伝学説に圧迫されていて、よいにしろ悪いにしろ、中国人はどう転んでも中国人だと思えます。だから国粹の保存など正に不必要なのです。どうせ国民性は消えてなくなるはずがありませんから、欧化の提唱も虚しいのです。天下に、どうやって化したところで二粒の豆のように似た民族などありえませんか。いま肝要なのは個人と国民の自覚を喚起することで、できるだけ古今の文化を研究・紹介して、自由に浸み通らせ、民族精神の滋養剤とすれば、それによって自動的に新しい漢族の文明を生み出す望みがあります。これはわたしの勝手な夢想であり、またわたしが国民文学の提唱に賛成する理由でもあります。しかし、時には又こうした夢想もふわふわしたもので、当てにはならないように思います。ル・ボン (Gustave Le Bon) の言うように、人間世界の事はすべて幽鬼が主体であります。その結果ほとんど人間は幽冥世界の裁判官——あるいは<sup>ひけん</sup>毗鬻国王の手にある賃借帳を信じてしまいます。中国人は運命として決っている奴隷なのです。こうですから又わたしは一切の提唱に対してどうしてもいささか冷淡になってしまうのです。わたしの小さな願いは、いまはただせいぜい一分でも理解できればということにあり、一厘でも成功できるということにはありません。だからこれもまたかまわんかまわんなのです。草々。

民国十四年六月一日。

※初出：1925年7月6日『語絲』第34期